

原著) 「お太鼓結び」の歴史的変容についての実践的研究

The practical research about historical change of 「O-taiko Musubi」

青木 和子

抄 録

現在の和服姿における帯の代表的な容(かたち)である「お太鼓結び」について、その結び方の歴史とその構造がどのように現在に至るまで変化してきたのかを明らかにする。そしてなぜ、長い年月を経た今もなお「お太鼓結び」が帯結びの典型で継続しているのかについて、江戸時代末期と現在の帯型の類型を比較し実際に帯を締める実践研究を行うことにより、その社会的・機能的要因を論じる。

キーワード: 着物 きもの 帯 帯結び お太鼓結び 美道 持続可能な着物スタイル

I. 緒言

日本の和服(きもの)の「帯結び」に関して、帯の種類や実際に帯を結んで形にするまでの過程を示した本や手引書はたくさんあるが、帯や帯結びに関して歴史的に取り上げた既往研究や資料は少ない。

なかでも、「お太鼓結び」は、江戸時代の古書『近代長者鏡』(1714)にその名前が見られ、現在に至るまでの300年以上もの間、日本人に最も親しまれる帯型として不動の地位を保ち続けてきている。そして、現在も「きもの」を着る多くの女性が、一様に同じ形の「お太鼓結び」をしている。数々の帯型がある中で、なぜ「お太鼓結び」が最もポピュラーで、多くの人に結ばれる典型的帯型となったのか、本稿ではこの「お太鼓結び」に焦点を当てる。定型化した要因は機能的な形にあるのではないかという仮説をたて、歴史的考察を行うとともに江戸末期に結んだとされる「お太鼓結び」と現在の「お太鼓結び」を実際に再現し、比較考察した。

帯の変遷として、主に室町時代から江戸時代に様々な結びが起り、歌舞伎役者による流行も生まれたが、大正時代以降の帯結びは「太鼓結び」にほぼ集約され、時にいくつかの結び方を生み出しつつも、大きな変化はなかった(長崎 2009) という。

また、帯の「お太鼓結び」について発祥の背景を述べ、大槻如電の『花衣』(1899)に記されている亀戸天神の太鼓橋の再建という一般の定説に対し、遠藤武の論文『お太鼓結びの起源に関する疑い』(1936)を先行研究として、「お太鼓結び」の発祥を検証した。

その結果、「お太鼓結び」が現代にまで続いた要因のひとつに「小物」の利用があり、「お太鼓結び」は、日本人の体型をカバーするという機能的な要素に加え、小物の登場により、袋帯と名古屋帯が考案され、それにより「お太鼓結びの定型化」が起きたことがわかった。

そして、「お太鼓結び」の発生の由来については、文化14年(1817年)の「江戸亀戸天神の太鼓橋再建」に因むものではなく、遠藤(1936)が唱えたように、それ以前から「お太鼓結び」が結ばれていたということが明らかになった。

本稿は、帯や帯結びに関して歴史的に取り上げた既往研究や資料が少ない中、先行資料に見る帯の変容の中から、特に重要と思われる帯型を実際に結ぶ実践を行い、現代の結びとの比較を行った点に特徴がある。

II. 研究方法

「お太鼓結び」の起源および定説について文献研究を行いその結果をⅢで述べる。また、帯型の歴史的資料をもとに再現し、現代の帯型との比較を行った結果をⅣに述べる。

III. 研究結果

1. 帯の歴史

多く見る「きもの姿」は、「きもの」と「帯」の組み合わせが一般的であるが、「人類の衣服発達史の中で、最初に登場するのは帯であるという説がある。衣服の存在が確認されるのは旧石器時代の終わり頃となされているが、帯はそれ以前から存在していた」(長崎 2009 p. 17) というように、帯は和服を着用する構成において欠かせない要素のひとつである。

帯は衣服が発達する上で最も古くから人間とのかかわりあいをもってきたと考える。長崎(2009)は、帯の起源について「衣服をまとめ固定するものではなく、腰に結んで呪術とした紐であった」(p. 17)と述べ、衣服を着用する以前は、紐を腰に締めて結び、身体の保護、性別、等を表現し、護身や装飾に用い、やがて腰飾りなど装飾的な面を含め、今日の「帯」に発展してきたと述べている。

女性の服飾では、七世紀後半に作られたであろうと言われている奈良県明日香村の高松塚古墳の西壁に描かれている婦人像(図1)などに帯を見ることができる(長崎 2007)。



図1：高松塚古墳壁画

その後の歴史については、山名(1996)、長崎(2007)、高田(1995)の研究にもとづき以下のように考えている。

奈良時代に中国から唐衣が伝来した後、公家社会において男女が袴を履くようになり、下着の小袖は袴で押さえ、その上に他の衣を重ねて着用したため帯が表面に出なかった。

室町時代後半あたりから、身分の上層位には下着、庶民には上着とされていた「小袖」が、広く上着として用いられるように変化したことから、小袖の前合わせを幅の狭い帯で押さえるようになり、帯が表面に現れてくるようになったとされる。

桃山時代から江戸初期における庶民の帯は、男女ともに差がなく、幅の狭い紵帯を締めていた。長さは2m位のもので、素材に決まりはなく、表着などの布地や切り売りの布地を利用していたとある。この細い帯のほかに、豊臣秀吉が文禄の役(1592年)に本営を九州の名護屋(佐賀県)に構えたときに、組紐技術によってつくられた組紐の帯を「名護屋帯」といい、紐先に30cmほどの房のついている名護屋帯を幾重にも巻き結び垂らしている姿を『湯女図』(図2)『彦根屏風』などにみることができる。文禄年間(1592～96年)の帯は、帯幅は6.5cmほどで芯に和紙を用いた。

その後、帯幅は7.5cmと広くなり、遊女の帯幅は15cm位の幅広いものが用いられ、寛文末頃から帯の幅が広くなり、延宝(1673～81年)には仕立ても2、3種に増えて、長さも2mほどから3.7mと倍近くになった。



図2：『湯女図』(重要文化財、MOA美術館蔵)

一方、「結び方」の変容は、寛永(1624～44年)ごろまでの遊女は帯の端を差し込んでいたが、明暦・万治(1655～61年)のころから前で結ぶようになった。

寛文（1661～73年）の頃には、帯の結び目の位置は後ろ結び、前結び、横結びと変化し、後ろ結びは「未婚」前結び、横結びは「既婚者」の代名詞となった。

延宝・天和（1673～1684）には、「カルタ結び」¹と歌舞伎女形の上村吉弥が、大きな男性の身体でもバランスよく見えるようにと帯の幅を広げ、大きな帯結びである「吉弥結び」を発表するとそれが大流行となる。

「吉弥結びは、いわば最初の優雅で装飾性に富んだ帯結びの形を備えたものとして、その史的意義は大きい。ここに至って初めて明確に男性のものから、まったく独立した女性独特の帯結びが誕生したことになるう」

（山名 1996 p. 153）。これは、後世の「だらり系」の先駆的存在である。これを機に、寛保（1741～44）以後は歌舞伎役者の女方水木辰之介が「水木結び」を、江戸若女方瀬川路考の結んだ帯結びにより、「路考結び」²が流行った。帯結びには歌舞伎役者や芸者にちなんだ名称が多く、その影響は大きかったと言える。

天和3年（1683）、一方の側を黒地にして他面に流行や年齢、季節など好みに応じて布地を合わせた「鯨帯」（現在の丸帯形式³）が現れ、帯型に関しては後述するが、「路考結び」が流行した同じ頃に、「おさらば結び」⁴も流行する。貞享から元禄（1684～1704）ごろに帯幅が広がる。帯幅の狭い江戸初期は腰のあたりに帯を締めていたが、宝永（1704～11）ごろは胸高に締めるようになる。そして、これらの帯を基点にして帯幅が30cmの広さになった頃以降に、町人の間で「お太鼓結び」が結ばれ始め、帯が衣服以上に重要な位置を占めるようになっていく。帯は、その進化に伴い幅を広げ長さを延ばし生地こだわりの持つと、視覚の上で重要な位置をしめるようになり、同時にその形も日本人の身体に合わせて変化してきた。

江戸時代にはすでに多くの帯型が出現していたが、大きく分けると3種類の系統があり、「太鼓系」（よこもの）、「立矢系」（たてもの）、「文庫系」（さがりもの）に分類でき（後述）、そのうちの「太鼓系」の基本で

ある「お太鼓結び」は、その形や機能性から最も多くの女性に結ばれることとなり、明治、大正、昭和、最終的には一番代表的な帯型になったのである。

「大正時代以降の帯結びは「太鼓結び」にほぼ集約され、時にいくつかの結び方を生み出しつつも、大きな変化はなかった。派手な代わり結びも考案されたが、流行には至らなかった」（長崎 2009）という。

2. 「お太鼓結び」の歴史的成立過程

2-1. 「お太鼓結び」の定義とそのはじまり

『広辞苑』によると、「【御太鼓結び】とは、『女の帯の結び方のひとつ。かけを結び目の中に入れて太鼓の胴のようにまるく結んだもの』と記され、お太鼓結びのイラストが掲載されている。また、『日本国語大辞典』（図3）には、「【名】 女性の帯の結び方の一つ。かけを結び目の中に入れて、太鼓の胴のように丸く結んだもの。文化14年（1817年）江戸亀戸天神の太鼓橋再建にちなんで「路考結（ろこうむすび）」を改称したもの。おたいこ。」とあり、ここにもイラストが載っている。

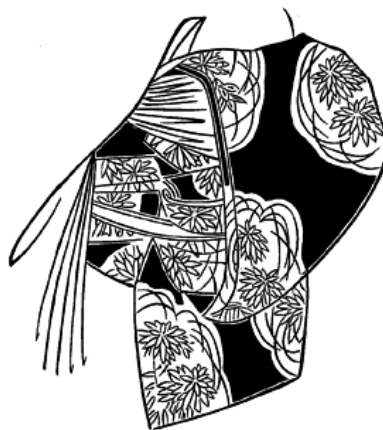


図3：『日本国語大辞典』より

また、『大辞林』（三省堂 第三版）によると、「【御太鼓結び】とは、『女帯の代表的な結び方。帯の一端を太鼓の胴のように張らせ、その中に掛けをおさめ、帯締めで強く締めてとめる結び方。おたいこ。』とある。このように、「お太鼓結び」は、女帯の代表的な帯型であること、かけを結び目の中に入れて帯締めで締めた結びであること、太鼓の胴の形（あるいは亀戸天神の太鼓橋のような形）の帯型であることと定義づけられる。

¹ カルタ結び：カルタ3枚を横に並べたような結びで男女共の流行結び

² 路考結び：「お太鼓結び」の歴史的成立過程で後述

³ 丸帯：両面共に表となる帯

⁴ おさらば結び：「お太鼓結び」の歴史的成立過程で後述

「お太鼓結び」の由来は、『日本国語大辞典』によると「文化14年（1817年）江戸亀戸天神の太鼓橋再建⁵にちなんで「路考結び」（ろこうむすび）」を改称したもの」とある。

2-2 「お太鼓結び」の定説

「お太鼓結び」の発祥については、一般的には先の『日本国語大辞典』の通りと定説されているが、それに対して異論を唱えている論文がある。

遠藤は『「お太鼓結び」の起源に関する疑い』（1936）において、文化14年より100年も前に書かれたとされる『近代長者鏡』（1714）において、「太鼓結び」と記述された箇所があること、また浮世絵師鈴木春信の描いた絵画にも「太鼓結び」をした女性が描かれていることを指摘している。（図4）

確かに『近代長者鏡』には赤い線を入れたように「太鼓結び」の文字がある。

また、『近代長者鏡』の記述に、「近年世間いたりぜんさくになりて奥様は古金五両かさねて、指櫛にさし給えば、下女中居までが茶縹子の帯をむなさきに太鼓結び…」と、「下女中居までが」という文脈がみられることから、当時はこの結び方が一般的であったことが推測され、さらに、「帯をむなさきに」という箇所からは、前帯（帯を前で結んでいる）であったことが読み取れる。

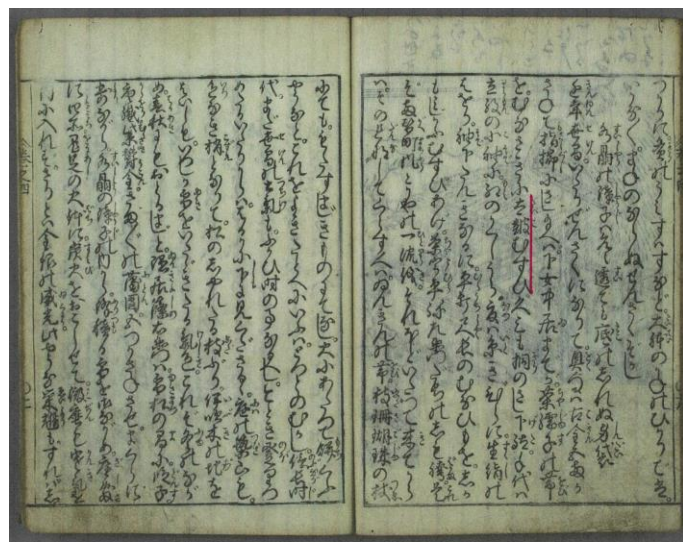


図4：『近代長者鏡』第4（1714年）

また、その60年後、1774年に鳥居清長が描いた「亀戸の藤見」（図5）にも、前帯のお太鼓を見ることができる。



図5：鳥居清長「亀戸の藤見」

（上は全体、下はお太鼓部分の拡大図）

天明（1781年4月25日～1789年2月19日）

⁵ これは、大槻如電の『花衣』（1899年）の文献に、「サテこのオタイコと名に付きましたのに。一條の御物語がございます。七年前でした私が四方梅彦と。近世女風俗考と申す書物のことに付きまして。種々な雑談の中に。梅彦老人申しますのに。女が結ふオタイコといふ帯は。亀戸天神の太鼓橋が出来た時に。江戸の人が珍しがって。渡りに出かける者が。其當座毎日何百何千という人数で。一時は市中一般の話ぐさと成った事があった。其頃からこの帯の結び様が始まって。太鼓に結ふといった事がオタイコと唱へることに成ったのだ。」（資料1）

という文章があり、それを根拠に、1817年（文化14）江戸・亀戸天神の太鼓橋の再建完成を機に太鼓結びが行われるようになり、深川の辰巳芸者が太鼓橋にちなんで結んだのが最初であると書いているので、それが一般的な定説になった。

その他にも、浮世絵師が描いた絵画から、「お太鼓結び」であろうとされる作品が幾つか確認できた。

たとえば北村哲郎氏は、天明期には「鏡持美人図」(図6)を提示して現代のきもの姿の原型が出来上がったと述べている。



図6：勝川春暁筆『鏡持美人図』天明期
(左は全体、右はお太鼓部分の拡大図)

また、鈴木春信の描く「お太鼓結び」は、まさしく現代の「お太鼓結び」と同じ形である。(図7)



図7：鈴木春信(1765年)

以上のことから、「お太鼓結び」の由来の起源は、一般に言われる文化14年(1817年)江戸亀戸天神の太鼓橋再建、にちなむものではなく、遠藤(1936)が唱えたように、それ以前から「お太鼓結び」が結ばれていたということが、明らかになった。

2-3-1 「お太鼓結び」の成立

山名(1996)によると、「お太鼓結び」の帯形の成立は、「路考結び」(明和年間の名優であった二代目瀬川路考に託して命名された)がその前身で、「路考結び」の結び方はまず一重結んで、垂れの先と手先の部分をもう一度垂れの内側で締め、その余りを両横に出す型であろう…(山名1996)と述べる。

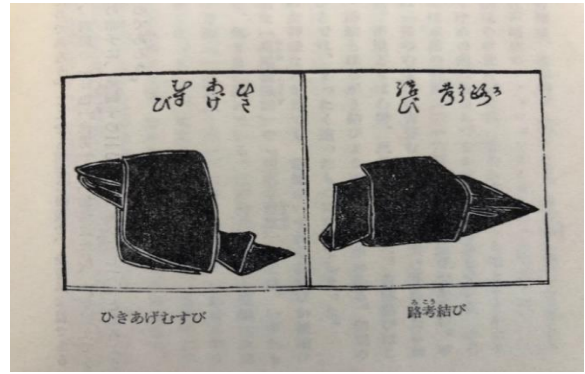


図8：『都風俗化粧伝』より 右が「路考結び」

また、同結びの変化は、深川芸者衆の中から始まったのかも知れないとし、「太鼓結びは前出のおさらば結びを基点として自然発生的に生じた帯結びといえることができる。帯を一重結んだ後、垂れの部分をそのまま下げるようにすればおさらば結びであり、垂れの部分を持ち上げ先端を少し残して抱え上げると太鼓結びになるであろう」(山名1996)と述べている。



図9：「おさらば結び」

『都風俗化粧伝』(1982)に、この「おさらば結び」(図9)と酷似した「一つ結び」(図10)もある。



図10：「一つ結び」

このように、結び方の特徴からみて「お太鼓結び」の帯型の成立期を明和・安永期（1764年～1781年）直後と考えても不自然ではないと山名は結論づけている。確かに「路考結び」「おさらば結び」「一つ結び」はいずれも、見た目も似ており、結びの手順も同じようであることから、「お太鼓結び」がこの時期に誕生したと推察することができると考える。

しかし、「お太鼓結び」の成立時期を特定することは難しく、遠藤（1936）の文献にも、特定できない事由として、当時の帯結びに関する文献が乏しいこと、「吉弥結び」や「路考結び」のように歌舞伎役者の名前を由来としない帯結びであること、が挙げられている。

他に、「お太鼓結び」は民衆から自然発生で生まれたものである、との説もある。筆者の見解として、結ぶ工程が複雑なものや、目立つことに特化しているような帯型は長く続く可能性は低いことから、「お太鼓結び」は、様々な利点があったのではないだろうか。もし民衆から自然発生したものである場合、日本中に広まりこれほど長い期間継続して結ばれていることから推測すると、「お太鼓結び」は、女性にとって見栄えの良さと共に、生活の利便性があったのではないかと仮定することができる。この仮説について、結ぶ工程、付属の小物を含み、「着心地」や「安定感」などの機能的側面も鑑みて、実際に結ぶ実践を行い、江戸末期と現代の「お太鼓結び」を比較し考察する。

2-3-2 「お太鼓結び」に必要な小物の誕生

現在の「お太鼓結び」に使う小物に、帯締め、帯枕、帯揚げがある。これら小物の使用について、歴史文献や絵画を確認したところ、江戸時代末期以前に用いられている様子は目視できなかった。小物がいつ頃から使われ始めたか。これについては、大槻如電の『花衣』（1899年）⁶の文献に、帯を止める「帯

止」という言葉を確認することができた。

また、山名は、「さらに太鼓結びでは垂れと手先を結び合わせることをせず、手先は腰部に抱え上げられた垂れの内側に畳み込まれているにすぎないから帯じめは欠かせない必需品にまで発展する。いい換えれば、帯じめまたは後述する帯揚げなどの付属的服具によって結び目が保持されているといっても過言ではない。」（山名 1996）

山名は、現代の「お太鼓結び」に必ず使用する付属品である「帯締め」（後述）と「帯揚げ」（後述）のはじまりについて触れ、その発生時は江戸末期頃と述べている。

高田俊男⁷は、著書『服飾の歴史』の中で、①江戸末期（1817年）には、「たれ」⁸の部分がぶらぶらと

⁷ 『服装の歴史』（P318）「和装の中で重要な役割を担う帯の結び方にさまざまな流行変遷がみられる。近代以降、非常に流行し、代表的な結び方となったものにお太鼓結びがある。これは成人の女子が結ぶもので、後腰のところに帯の一方を太鼓の胴のように張らせて形作り、帯締めといわれる紐を中に通して前で結んで強く締めつけ、帯揚げといわれる柔らかい絹の紐をお太鼓結びの上部内側に通して前で結んで固定させる結び方である。しかし、これは帯結びとはいいいながらも、帯自体は胴に廻して後腰で型を整えるのみで、結んではいたため、帯締めの助けで締めつけているものである。また、お太鼓結びは、角をとった方形の部分に工芸的表現の空間を与えられ、とくに趣向をこらすものとなっている。しかしこの結び目の形がかなり大きく、外国人の目には奇異なものを背負っているように映るといわれる。前述のようにお太鼓結びに欠かせないのが帯締めで、したがって、これは江戸時代後期からお太鼓結びとともに使われ始めた紐である。明治時代には、生地として羽二重、縮緬、緞子の類を使い、それを長く裁って縫った紵紐、あるいは簡単な丸組や平組に帯締めが使われていた。大正時代に、白洲正子氏の母上、樺山常子氏と宮中装束調進や古代染織復原に携わった私の父高田義男の協力で、正倉院伝来の組紐をはじめ平安時代以来の公家や武家の組紐を復原して帯締めに応用するようになり、それが広く普及しはじめたのである。

⁸ 帯は帯の端と端について、一方を「手」、もう一方を「たれ」と称する。

⁶ 「このやの字結の外に。オタイコと申す結び方が追々行れました。其子細は文化の末年から文政の初へかけまして。中年増の帯が。又々後へ廻りました。スルとやの字を緩く結びます事になりました。カケの方ばかり横へ出まして。タレの輪は。外へ出ない結び方となりまして。帯止と申します丸打の紐で。後から前へ占めて。ズラない様に止めます。」（p125）

揺れて固定されておらず、その揺れる「たれ」の部分を固定するために、帯を止める丸打の紐（今でいう丸紵けで、引き伸ばした真綿などに芯を入れて丸い棒のように紵けて仕上げた紐）を使い始めていたこと、②帯を止める紐は、平安時代以来の組紐を復元し帯締めに応用するようになり、広く普及することになった、ことを挙げている。

小物の中でも、「帯締め」の役割は大きく、江戸時代の「お太鼓結び」と現代の「お太鼓結び」では、形は非常に似ているが、帯締めを使用する、使用しない、によってお太鼓結びの構造上結ぶ工程が全く異なる。

2-3-3. 袋帯、名古屋帯の普及

江戸時代は、現在でいうところの「丸帯」（表裏両面で使える帯）の幅を半分に折って胴に巻き、幅を開いて帯を結んでいた。大正時代には、新たに「袋帯」（幅は丸帯とほぼ同じであるが片面しか使えない帯で、現在一番フォーマルな帯となって結ばれている）が生まれ、さらに帯の変遷で特筆すべきは、「お太鼓結び」を結ぶだけのための帯として名古屋帯（胴に巻く部分だけがすでに半になっている帯）が考案されたことである。

「名古屋帯」は、「生地節約」、「時間節約」、「簡単に結べる」を目的とした帯で、大正初年に、名古屋女学校の教員であった腰原春子氏が創案した改良帯で、瞬く間に日本中に広がり、現代も、街で見かける和服姿の定番である。「一重太鼓」は名古屋帯でしか結べない。⁹ つまり、名古屋帯は「お太鼓結び」だけのために作られた帯なのである。

3. 江戸末期と現代の「お太鼓結び」を

実際に結ぶ実践

鈴木春信が描いた浮世絵は、他の絵師のものと比較するとお太鼓結びの形がはっきりわかる。お太鼓結びの形を顕著に表している 1765 年頃に描かれた彼の作品を 4 点挙げて、お太鼓の部分拡大してみた。

ここでわかることは、当時は帯を前でも後ろでも結んでおり、結びと女性の生活背景、年齢などが関わっていたことが読み取れること、現代のお太鼓と同じ形はしているものの、小物つまり帯締めと帯揚げそして帯枕を使用していないことである。どの浮世絵を見ても、小物は描かれてはいない。



図 11：鈴木春信（左は全体、右はお太鼓部分の拡大図）



図 12：鈴木春信（左は全体、右はお太鼓部分の拡大図）



図 13：鈴木春信（左は全体、右はお太鼓部分の拡大図）

⁹ いかに多くの女性たちが「お太鼓結び」を結んでいたか、いかに手軽に結びたかったか想像に難くない。



図 14：鈴木春信（左は全体、右はお太鼓部分の拡大図）

現代の「お太鼓結び」は、形を作った最後に帯締めを使用して押さえているので、帯締めをほどけばその形はすぐに崩れてしまう。つまり江戸時代は帯締めを使っていないことから、帯がほどけないように帯自体で結んでいたことがわかる。そこで、小物を使用しない「お太鼓結び」を、遠藤氏の論文（1936年）に見る、お太鼓結びのイラスト（図15）を元に実際に再現し検証を試みた。

現代においても、帯の「て」と「たれ」を結ぶ方法で「お太鼓結び」をつくる方法があるが、帯締め、帯揚げ、帯枕は常に使用している。よって当時の帯を実際に結んでみることは、現代の帯結びとの比較には必須の要件となる。

次に、江戸時代には袋帯や名古屋帯は存在しなかったが、一部の春信の絵が太鼓の部分が一重ではなく二重と見られることから、お太鼓の部分の二重と一重となる要因が単に帯そのものの長さによるものだったのかを検証する必要もある。そのため、現在の袋帯では二重太鼓を名古屋帯では一重太鼓を結び、現代の帯の長さで再現できるものかどうか、それも試みることにした。

「殊に全社の浮世草子の記載には「下女中居まで…」とあるのをみると、当時あるひは、この結び方が一般に普及化されて居たらしく考へられるのであり、絵画上からもかくみられるのである。兎も角正徳元文年間には、この結び方が行はれて居た事は疑ふ事は出来ない。然らば、その当時の結び方が現今吾々が考へる様な結び方と同じものになるであらうかが、ここに問題となるが愚生は、これを解く前に、

先づ現今明治の「お太鼓結び」が如何なるものであるかを説明して置こうと思ふ。～中略～明治年間の婦人は多く第一圖7の如きものであると見もし、聞きもして居る。」（遠藤 1936 p. 265-266）

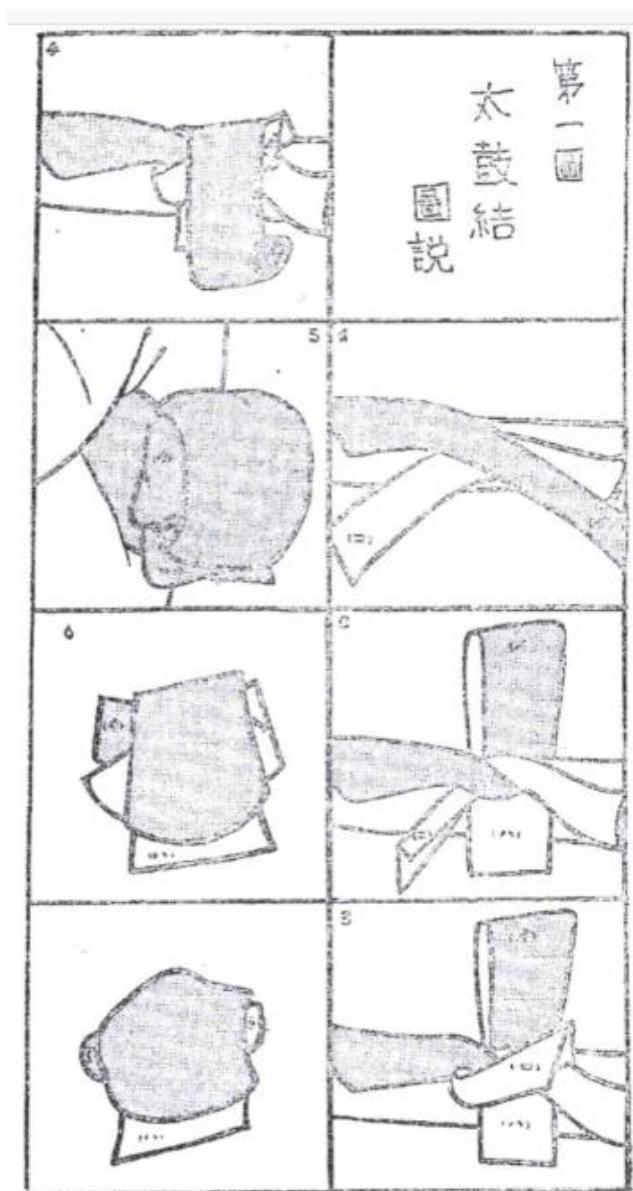


図 15：太鼓結び圖説（遠藤 1936 より）

このイラスト図は帯を身体に巻き、一回結ぶだけで形ができるようになっている。多くの浮世絵から見る限り、この結び方が「お太鼓結びの原型」であることに相違ないといえる。手順も簡単であることから日常生活の動作に都合がよく、また図③の状態は、だらりと帯を下げている状態（前述の「おさらば結び」）も可能であることから、実際にこの結びを実践してみることにする。



① 第一圖の1
(胴に巻く)



④ 第一圖の3
(手先を左から右にあずける)



② 第一圖の2
(たれを残し、帯の残りと手先を一結び)



⑤ 第一圖の5
(あげた帯をおろし、下のワの部分にあずけた手先に下から挟めて整える)



③ (残りの帯をおろす)



図16 おさらば結び(前述)

*実際に使った帯は、現在の名古屋帯(簀八寸帯)

*上記写真①-⑤筆者撮影

I. 「名古屋帯」を使った検証



- ① 胴に二巻きし、手先を下、たれ先上に一結び。
手先を全部抜かず、右肩を輪の状態にした
まま残す。



- ③ 残ったたれ先を、手先の結び目に巻きて
お太鼓結び（一重太鼓）が完成する



- ② 肩に残した輪の部分と、手を一結びする。

* I－①から③は筆者撮影

Ⅱ.「袋帯」を使った検証



- ① 帯の手先を左肩にあずけて二巻きし、
- ② 右肩に残した輪の部分と下に手先を下にたれ先上に一結びする下げた手先とで一結び。この時、たれ先を全て抜ききらず、右肩を輪の状態にしたまま残す。



- ③ 残ったたれ先を、結び目に二重に巻きつけお太鼓結び（二重太鼓）が完成する。

* Ⅱ－①から③は筆者撮影

- ③ 肩に残した輪の部分と、手を一結びする。

IV. 考察

現在も「きもの」を着る多くの女性が、一様に同じ形の「お太鼓結び」をしていることについて、なぜ「お太鼓結び」が多くの人に結ばれる典型的帯型となったのか、その要因を「小物」の利用と、「お太鼓結び」が機能的な要素を持つのではないかと、という仮説をたてて実践的な検証を試みた。

今回実際に結んでいてわかったことは、以下の4点である。

- ① 「結ぶ方法のお太鼓」は、帯の素材との関連が深い。比較的柔らかい生地でないと結びづらい。特に、江戸時代は木綿が発達した時代であるから、庶民にとって豪華で高価な絹でできた帯はあまり結ぶ機会はなく、柔らかい木綿の帯は一般的であったし、毎日着るのには機能的で都合がよかったのではないかと考えられる。町人の各家では、母親が古くなったきものや、小さくなったきものを帯にするなど、布を継ぎ足しながらきものや帯を仕立てることも日常であり、その中で手間をかけずに結び、きものを押さえるという、この木綿の帯そのものの利便性が「お太鼓結び」の原点であり、生活に即した結びであったのではないかと考えられる。
- ② 当時は、丸帯仕立て（表も裏も使える帯）が主流であったことから、どちらも表に見える点で便利で無駄がなく、見た目にも遜色ない結び方であったことが伺え、これらが長く継続されてきた要因であったと結論づけることができる。
- ③ 実践では、2種類の結び方を実際に結んでみたが、どちらも帯揚げと帯締めを用いなくともほどこることがない安定した「お太鼓結び」を結ぶことができた。また、「結ぶ」「挟む」という手間をかけない行為により、この結び方が励行されていたのではないかとすることも確認できた。その中でも大変重要なことは結び目にある。現代の「お太鼓結び」は、帯自体を痛めないためにお太鼓部分が江戸時代のように帯自体で結ぶということをあまりしなくなったので、そのままではほどけてしまう状態のところを帯締めと帯枕を包んだ帯揚げでおさえている。江戸時

代より重量のある現代の帯自体で身体にきつく結ばずとも、お太鼓の上部では帯揚げが、お太鼓の中心では帯締めがしっかりその重さを支えて結んでいるので、帯が下がらないばかりか苦しくないという利点がある。支えるポイントを一か所に集中させず複数にしていることが安定につながっていて長時間結んでも疲れないからであろう。

- ④ また、「お太鼓結び」はその形状からヒップラインを隠すことができる帯型であり、女性の体型に対するコンプレックスを軽減できるという利点がある。

しかし、きものを着用する多くの人は、現在の「お太鼓結び」は、結ぶ過程と出来上がりの形の定型化により、「結ぶ方法が難しい」「結ぶ過程が長いので時間がかかる」「後ろで結ぶから手探りが大変」などという問題を抱え、それによりきもの離れという、日本の民族衣装存続が薄れてしまい兼ねない社会問題も起き始めていることは無視できない。

今後は、「定型化したお太鼓結び」から「定型でないお太鼓結び」を实践研究し、生活の中にある持続可能なきものスタイルを探求したい。

また、「装飾性」という視点についても検証していきたい。なぜなら、太鼓部の造型は四角形であり、帯の四角に施された図柄は絵画的であることから、四角をキャンパスに見立て、帯の美しさを強調しているから、名古屋帯、袋帯の芸術的要素についても深く探求する必要があるからである。

これからも、山野学苑が唱えている「美道」、人の美しさを総合的にとらえ、外見と内面の美しさを追求する学びの理念に基づく考察を重ねていきたいと考える。

文献

- 1) 青木英夫『服装史』 株式会社酒井書店・育英堂 1987年
- 2) 東朋美、森理恵「日常的きもの着用者（女性）のきもの着用実践のありかたと着物に対する意識」 京都府立大学学術報告 2008年

- 3) 伊藤元重/矢嶋孝敏『きもの文化と日本』 日本経済新聞出版社 2016年
- 4) 内田彩子、山口直子ほか「江戸後期から現代における着物の再現およびその着崩れと着装精度の検証」和洋女子大学紀要第54集 2014年
- 5) 遠藤武「お太鼓結び」の起源に関する疑ひ」1936年
- 6) 河北倫明『原色日本の美術 第30巻 近代の日本画』 株式会社小学館 1972年
- 7) 河緒実英『きもの文化史』 鹿島出版会 1966年
- 8) 北村哲郎『日本の美術 12 第307号 染織-伝統工芸』 至文堂©/169 1991年
- 9) 切畑健『日本の美術 6 第265号 染織(近世編)』 至文堂©/160 1988年
- 10) 切畑健『日本の女性風俗史』 紫紅社 2003年
- 11) 九鬼周造/藤田正勝『「いき」の構造』 株式会社講談社 2003年
- 12) 高田倭男『服装の歴史』 中央公論社 1995年
- 13) 高橋雅夫『都風俗化粧伝』 株式会社平凡社 1982年
- 14) 高橋雅夫『守貞謾構図版集成 普及版 上巻』 株式会社雄山閣 2012年
- 15) 高橋雅夫『守貞謾構図版集成 普及版 下巻』 株式会社雄山閣 2012年
- 16) 辻惟雄/大久保純一『原色日本の美術 第18巻 浮世絵』 株式会社小学館 1994年
- 17) 永井路子/伊原昭『図説 浮世絵に見る色と模様』 河出書房新社 1995年
- 18) 長崎巖『京都書院美術双書 日本の染織 4 小袖』 京都書院 1993年
- 19) 長崎巖『日本の美術 10 町人の服飾』 至文堂 1994年
- 20) 長崎巖『日本の美術 514 帯』 至文堂 2009年
- 21) 生川正香著、塚原鉄雄解説『近世女風俗考』 和泉書院 1979年
- 22) ニッポン再発見倶楽部『日本は外国人にどう見られていたか』 株式会社三笠書房 2014年
- 23) 額田巖『ものと人間の文化史・結び』 法政大学出版局 1972年
- 24) バーナード・ルドフスキー『キモノ・マインド』 鹿島出版会 1973年
- 25) 日野西資孝『日本の美術 6 服装』 至文堂 1968年
- 26) ビューティーサイエンス学会『ビューティーサイエンス 第二号』 演劇出版社 2005年
- 27) 深井晃子『ジャポニスムインファッション海を渡ったキモノ』 株式会社平凡社 1994年
- 28) 服装文化協会『増補版 服装大百科事典 上下巻』 文化出版局 1990年
- 29) 村田孝子『浮世絵にみる江戸美人のよそおい』 株式会社ポーラ・オルビスホールディングス ポーラ研究所 2017年
- 30) 森理恵「桃山・江戸のファッションリーダー 描かれた流行の変遷」 株式会社塙書房 2007年
- 31) 山名邦和『日本衣服文化史要説』 関西衣服生活研究所 1983年
- 32) 山野愛子ジェーン監修『山野流着装教室初伝教本 ©』 山野流着装教室発行 1979年第一刷
- 33) 山根有三/鈴木重三/辻惟雄/小林忠/池上忠治『原色日本の美術 第17巻 風俗画と浮世絵師』 株式会社小学館 1971年
- 34) 柳田国男『木綿以前の事』 株式会社岩波書店 1979年
- 35) 楊州周延『千代田城大奥の風俗 江戸錦』
- 36) Ofra Goldstein-Gidoni「KIMONO AND THE CONSTRUCTION OF GENDERED AND CULTURAL IDENTITIES」 Tel-Aviv University 2001

関連資料

きもの健康学より3. きものの帯はなぜ苦しい？ラクにするには？

<http://kimono-science.org/why-is-the-kimono-band-so-painful/>

The practical research about historical change of 「O-taiko Musubi」

提出日：2021/02/21